

## チャーチランドの道徳生得説批判の検討

植原亮（関西大学）

道徳生得説では、道徳を人間に生得的に備わるものとして捉える。古くはプラトンにまでさかのぼるこの見解は、近年では、道徳文法ないし道徳器官に関するマーク・ハウザーの主張や、道徳に関わる生得的な直観についてのジョナサン・ハイトの試みに見られるように、心理学などにおける経験的仮説として提出され、盛んに議論されるようになっていく。この流れは、道徳を科学的な探究の対象として扱い、それに関する理論の構築を目指す点で、倫理の自然化というプロジェクトの一翼を担うものだといえるだろう。

一方で、パトリシア・チャーチランドは、その近著 *Braintrust* において、道徳の生物学的基盤に関する考察を展開している。チャーチランドによれば、道徳とは、生物の自己に対する気遣いを出発点として、それが愛着や信頼を通じて、子や配偶者や血縁者、さらには見知らぬ他者への気遣いへと拡張したものである。そして、神経科学や進化生物学や行動経済学など経験諸科学の知見を動員してその基礎を明らかにする、というのがこの著作の目標である。

このようにしてチャーチランドもまた倫理の自然化へのアプローチを試みるのだが、しかしながら彼女は道徳生得説に賛同するわけではなく、むしろそれに対して積極的な批判を行う。なるほど、協力行動をはじめとする人間の道徳的行動や特定の状況に関する道徳的直観には、文化によらない普遍的な側面が存在し、したがってそれは人間の道徳の生得性を示していると考えたくなる。だがチャーチランドによれば、道徳生得説を導くこのような議論は、以下の理由から決して十分なものとはいえない。第一に、ある行動が生得的だという主張一般が簡単に成立するわけではない。ある行動の生得性の要件を、当の行動を生み出す神経回路の組織化が遺伝子によってプログラムされていることや、その行動の習得が容易であること、あるいは普遍的に見られることに求めたとしても、それぞれ重大な困難に突き当たってしまうことがわかるというのである。そして第二に、道徳生得説がその根拠として挙げるような道徳的直観の共通性・普遍性は人為的に生じた見かけのものにすぎない可能性が少なからずあり、またそうした直観についての説明を支える経験的な証拠も非常に弱いものでしかない、とチャーチランドは批判するのである。そして道徳に見られる普遍的な側面について、チャーチランド自身は、人間において生じるありふれた問題に対する共通の解決方法として理解しようとの説明を与えている。

しかし、以上のチャーチランドの道徳生得説批判に関しては、いくつかの疑問が浮上することになる。たとえば生得性の概念については最近急速に議論の蓄積が進んでいるが、そうした議論から見て、チャーチランドの批判はどの程度有効なのだろうか。またかりにその批判が十分に有効だとしても、道徳生得説は倫理の自然化にいっさい貢献しないものとして完全に棄却するべきなのだろうか。本発表では、こうした疑問点からチャーチランドの道徳生得説批判に検討を加え、その意義と射程を明らかにしたい。